

紫芳会だより ～輝く先輩達～

No.11

2013.6.1.発行

国立科学博物館 名誉研究員

大和田 守氏 (高校18期)

信州大学卒業、大阪府立大学大学院中退、農学博士

1977年から国立科学博物館動物研究部に在籍、2012年退職。日本からアジアにかけて分布する蛾類の分類と系統を、外部形態とともに生態・生理的知見を含めて研究している世界的権威で、新種や亜種を多数発見し、命名。主要著書は「日本産蛾類大図鑑」(分担執筆、講談社、1982)「日本産蛾類生態図鑑」(分担執筆、講談社、1987)「日本産クルマアツバ亜科(鱗翅目、ヤガ科)の分類学的研究」(英文、国立科学博物館、1987)「日本産蛾類標準図鑑、I-III」(分担執筆、学研教育出版、2011,2013)。



台湾花蓮縣慈恩、2012年9月13日
手に持つのは シロシタバ
呉士緯撮影



イボタガ



ホロタイプ標本の一部
(ホロタイプとは新種・新亜種発表
の基準となる唯一の個体)



オキナワリチラシ
上から石垣島、沖縄島、奄美
大島、隠岐の雄と雌

蛾の研究を目指したのは、立高に入学し生物部に入ってから、4月に高尾山の夜間採集に連れて行ってもらったのが、そもそもの始まりです。それまで蝶を集めていたのですが(当時はそういう少年が少なかった)、蛾についての知識はほとんどなし。でも、そこで出会ったのがイボタガです。青味を帯びた黄土色の翅に細かく刻まれた黒い縞々、その中に潜む目玉模様、ふわふわの毛。ちょっと気味悪く感じる人もいるでしょうが、我慢してくださいね。この蛾に感動し、魅了されてしまった少年がいたのです。その年の夏、図鑑でこんなのを採ってみたいと思っていた憧れのシロシタバにも高尾山で遭遇。前翅に地衣類の模様をあしらひ、後翅の白地に黒は目玉模様に見えなくもないですね。ということで、この蛾を生物部誌「Planaria」の表紙に、自分でガリ版を切って刷ってしまいました。

博物館では、海外調査で8カ国の蛾類を収集し、研究してきました。ネパール(1979, 81)、インド(1981, 83)、タイ国(1983, 87)、フィリピン(1985)、マレーシア(1987)、台湾(1989-91)、ベトナム(1993-94, 96-99, 2001-03)、中国(2003-)。現在は、台湾と中国の若い研究者たちと共同で日本に関係の深い蛾類を調査しています。もちろん、国内も与那国島から稚内まで行っています。このような自分の研究のほかに、皇居の動物相調査にも参加しました。1996年から開始されたこのプロジェクトは、自然教育園、赤坂御用地、常盤松御用邸も調査し、2013年に第II期調査の結果をまとめます。18年におよぶ都心部の大型緑地調査で得られた蛾類標本は3万点を超えました。ちょっと自慢出来ますね。

博物館の研究員になって良かったことは、たくさん海外に調査に行き、研究が出来たことのほか、多くの展示に関われたことです。とくに海外調査のあとの企画展は、収集した蛾を美しい標本に仕上げ、整然と配列してみなさんに見ていただくということで、力も入れましたし、出来上がったときの達成感も格別でした。現在の常設展示、地球館1階、系統広場の隣、進化のコーナーにある「オキナワリチラシ(マダラガ科)の亜種分化」の展示は、ぼくの研究成果です。機会があれば、ご覧ください。